公開　この印の付いている箇所は公開させていただきます。

第１号様式（一部公開）

平成２２年５月２７日

（あて先）
財団法人名古屋都市整備公社理事長

申請者

所在地	
公開 名　称	山崎川グリーンマップ
代表者	

第1-4号
平成 22.5.27
名古屋都市センター
収受

まちづくり活動助成申請書

当団体のまちづくり活動について、名古屋都市センターまちづくり活動助成金交付要綱による助成を受けたいので、下記のとおり申請します。

記

1　助成を受けようとする部門（該当部門を○で囲んで下さい）

・地域“魅力”アップ部門　　・“はじめの一歩”部門

2　団体の活動について　公開

審査基準⑤ 活動実績と主体性	・提案内容につながる地域での活動実績を有しているか （団体の概要、活動紹介、これまでの活動成果等をご記入ください。） ・具体的にどんな熱意を注いでいるか

※「はじめの一歩部門」は審査の対象とはしません。
※参考資料として活動に関するチラシやリーフレットなどを添付することができます。
この場合、公正を期するため、Ａ４判３枚（両面）までを限度とさせていただきます。

団体の概要、活動紹介、これまでの活動成果等を上記観点からご記入下さい。

山崎川グリーンマップは万博が開催された２００５年、瑞穂区村上北部・南部子ども会から誕生しました。設立目的は、地域のみんなが大切にしている山崎川と子供会の子供達を、万博の表舞台に出すことでした。こどもたちが作った山崎川グリーンマップは愛知県館グリーンマップ館に常設していただくことができました。その後、２００８年にスペインで開催されたサラゴサ水万博にもスペイン語で作ったパネルを展示しました。

当会は万博終了後も地道に活動を続けています。山崎川での生き物調査や地域のお年寄りからの聞き取り調査により、この川の生き物たちが、ここ数十年のあいだに、急激に数や種類を減らしていることに気付き、今、なんらかの手をうたなければ、たいへんなことになるという危機感を持ちました。

現在は１０月に開催される生物多様性条約 COP10 を契機に、地域のみなさんの「気付き」が生まれるのではないかという期待を持ち、活動を続けています。

第２号様式（公開）

平成２２年５月２７日

まちづくり活動助成「地域“魅力”アップ部門・“はじめの一歩”部門」

まちづくり活動提案書

1　助成を受けようとするまちづくり活動の提案について

提案名	山崎川の在来種保護の重要性を伝えるための生き物調査とハンドブック作成		
団体名	山崎川グリーンマップ		
提案の活動を行う地域	山崎川（おもに瑞穂区内）		
提案の内容	昨年こどもたちがおこなった山崎川のかつての様子の聞き取り調査から、ここ数十年のあいだに、この川から実に多くの生き物が消えていったことがわかった。それは決して過去のことではなく、現在も引き続き起こっていることなのです。しかもほとんどの人がその事実に目をむけようとしないのです。 マシジミ、イタセンパラ、トノサマガエル、ホタルなどなどが都市化のための開発によって絶滅してしまいました。現在は外来種による生態系のかく乱が大きな問題となっています。いっときはお菓子のおまけについてきたというほど一般に流通したミドリガメは30cmを超える大きさになって川に捨てられました。このカメは数十年も生き続け、山崎川ではコイとならんで一番目立つ存在となっています。このカメにより在来種のイシガメは絶滅寸前まで激減しました。また、汚れきった川にみんなが目を向けてくれるようにとの願いではじめられた放流コイも、今ではこの川にとってマイナスの影響を与えています。かつて山崎川にいたマゴイは絶滅してしまい、今では放流された外来種のコイにすっかりおきかわってしまっていることを知っている人はほとんどいません。 外来種により、本来の山崎川の生き物がたいへんな状況になっているということを一人でも多くの人に理解していただけるように、わたしたちは、聞き取り調査、生き物調査のほかにイベント開催、生き物ハンドブックを作成したいと思います。 瑞穂区汐路学区で「山崎川」をテーマに始まった地域委員会で、「山崎川の環境」にとって「生き物は関係ない。」と言う発言が何人もの委員たちから出ました。生物多様性の重要さの認知度の低さに愕然としました。わたしたちが今まで調査を続けてきた山崎川の生き物を、一人でも多くの人に知っていただき、経済的評価のできない生物、生態系がわたしたち地元住民にとってかけがえのない財産であることをしっていただくために、生き物ハンドブックを作りたいと思います。		
活動期間	平成22年4月～平成23年3月	助成金交付申請額	５０　万円

2　提案内容について

「1　提案の内容」について、以下の４つの視点で具体的に活動内容をご記入ください。

審査基準① 必要性	・地域に根ざしたまちづくり活動内容か ・自分たちの住んでいる地域を住みよい環境にする活動か ・地域との連携や協力が得られる活動か ・活動メンバーのみの趣味活動や仲間づくりではなく多くの人に理解や共感が得られる活動か

（提案活動の必要性について上記観点から簡潔に分かり易くご記入下さい。）
※過去の助成を受けた団体は、その活動助成の成果も踏まえて記入下さい。

おととしから、子どもたちが夏休みを中心に、地域のお年寄りから昔の川の様子や消えていった生き物の聞き取りをおこなっています。それはこちらの思惑以上に、お年寄りに好評で、それがきっかけで、わたしたちの活動の応援団になってくださった方もいます。

わたしたちの活動は、受け入れ方が年代によってはっきりとわかれます。とくに戦争でつらい思いをし、今の日本を作り上げてきてくださった高齢者の方には受け入れがたいようです。生き物がいて当たり前、とにかく日本を発展させることが第一であった世代には、生温くてしょうがないようです。それより少し若い世代、具体的には戦後に、山崎川で魚採りなどして遊んだ世代の人たちは、昔の楽しかったことを子どもたちにも引き渡したいという思いがあり協力的です。若いおかあさんやおとうさん、子供たちはすんなりと受け入れてくれます。このギャップの大きさにとまどうこともあるのですが、何人かの人たちに地道にがんばって続けるよう励まされるこの頃です。

昨年度、名古屋都市センターの助成を受けて作った生き物マップは好評でした。なお、昨年の観察会では 50 人以上の人が参加し、身近な生き物に触れる楽しさを伝えることができました。

審査基準② 独創性	・創意工夫にあふれた活動か ・地域性を活かした個性豊かな活動か ・新しい視点やアイデアがあるか

（提案活動の独創性について上記観点から簡潔に分かりやすくご記入下さい。）

観察自体は地道に続けることに意義があり、独創性はありません。今年は日本カメ自然誌研究会の協力でおととしからはじめたカメ調査を 3 日間連続で、観察地点もひろげて行う予定です。

今年は、「山崎川の環境を通じての町づくり」がテーマで、瑞穂区汐路学区ではじまった地域委員会で、山崎川生き物観察会が却下されました。来年度に向け、皆さんの認識度が高まるようにと、今まで関係のなかった地元の人たちを巻き込んで、実験的に観察会を開催する予定があります。

また、今年は生物多様性条約 COP10 が地元名古屋で開催されます。今ひとつ認知度に欠ける足元の生き物を守ることの重要性を、この機会を利用して、一人でも多くの方々に伝えることができます。

山崎川グリーンマップは生物多様性条約市民ネットワークの団体会員でもありますので、PR できるチャンスをいただくことができます。白鳥会場でのブース展示、エクスカーションをとおし、外から内へのアピールをしてみようかと思っています。

審査基準③ 実現性	・提案内容が具体的になっているか ・予算は妥当か

時期	活動内容

平成２２年４月	4日山崎川さくらウオークに参加。山崎川グリーンマップ配布
５月	1,2日・・アースデイに参加。 22,23・・日国際生物多様性の日のイベント参加 22日~29日・・瑞穂区役所山崎川さくら写真展にパネル展示
６月	生き物観察開始 生物多様性条約市民ネットワーク主催ビオ・カフェ手伝い 13日・・・子供向け観察会開催 河川水質、全国一斉調査に参加。
７月	環境省身近な野生生物観察事業に参加。 11日・・汐路学区生き物観察会と川の清掃 山崎川カメ、魚調査
８月	7月31日・8月1日・・東山荘での夏休み親子環境教室｛生き物調査実施｝ NHK夏休み環境教室
９月	生物多様性条約COP10サイドイベントなどの実施
１０月	山崎川、東山荘エクスカーション実施（COP10参加者が参加）
１１月	山崎川生き物観察会報告会実施
１２月	冬鳥観察開始
平成２３年１月	
２月	
３月	

審査基準④ 発展性	・今後の活動の発展にむけての視点や計画があるか ・助成後に地域まちづくり活動への波及効果があるか

（提案活動の発展性について上記観点から簡潔に分かりやすくご記入下さい。）

わたしたちの活動の地域へのひろがりは確実にあるようです。今回、年齢の上の方々から地域委員会などを通じ、痛烈に批判を受けましたが、今まで認知度のなかった活動に存在感がでてきたということなのでしょう。現在は山崎川沿いで活動する山崎川鳥撮り会、山崎川さくら塾などと協働し、次第に大きなことができるようになってきました。

山崎川でカメの調査をはじめたのは、わたしたちだけです。2年前に絶滅寸前まで数を減らしたイシガメが少しですが、ふえてきました。もし、放置したならば、今頃は絶滅していたかもしれません。イシガメが何万年前、何千年前から山崎川にいたのかはわかりませんが、それを次世代に残していくことはとてつもなく大切なことのように思います。

足元の小さな生き物が消えていくことに無関心でいることは、生き物の一つである人間も生きていけない環境を作り出してしまうような気がします。身近な生き物が一つ姿を消す、ということに地域の人がもっと関心をはらい、地域の自然を大切に思う心を育ててくれれば、おのずとこの地域はよくなるでしょう。

※ 第２号様式は、３ページ以内でご記入ください。

※ 用紙の大きさは、日本工業規格A4とします。